



「分裂病の生活臨床」

臺

弘 編

精神科で働く人にとって、初心者から長年のプロに至るまで、どのように勉強しても最後まで把え切れないのが、精神分裂病である。あまりにも個人差があり過ぎて疾病の構造論すらも諸説があるのである。そうなると必然的に治療の方針づくりにも多様性がでくる。

一般的に結果としては院内での治療効果をあげることにより全力投入し、院内寛解と呼ばれる状態まで持っていても、社会生活をするとう再発してしまう。最も難しい問題がこの本の柱である。

本書の著者であり編者である臺 弘先生はこの分野で知らぬ人のいない学究者であり臨床家である。東京大学教授を定年退官された後も、一筋に精神分裂病の治療に没頭しておられる。

「生活臨床」は群馬大学病院精神科で昭和33年に誕生し53年で20年を迎えた。当初は再発予防5カ年計画であって開放病棟、外来治療、退院患者の継続治療や生活相談、回復者の社会復帰へ発展し、やがて予後改善計画

と改称された治療指針が「生活臨床」である。この実践を支えた諸先生方のこれまでの論文と座談会が計23編載っていて、現役のばりばりでできらめくような方々が登場している。断片的にしか接しなかった「生活臨床」の文献の一大集録である。親しく名を聞く東村のことから結婚、職能訓練、在宅医療ほかがあり、多くの医療従事者が頭の中での構想をめぐらすことが、既に20年の真実の積み重ねでお手本として載っている。諸先生のお名前とテーマをあげたいが紙数の関係で断念する。

ちなみにこの出版社は創造出版で、臺先生が現在、最も力を入れて訓練生を指導している所である。良心的で地道に活躍され、ここまで発展されたことを知り、示唆されること大である。パラメディカルを含めて多くの人に必読をお勧めしたい。

B5判 277頁 ¥3500 1978年
創造出版刊 (〒182 調布市菊野台 1-24-41)

(北海道衛生部衛生大学設立準備室 作業療法士 鈴木明子)